「幸福」をめぐる諸考察 3
「幸福主義」以外の幸福感
☆反俗的･超俗的幸福観
☆哲学的･宗教的幸福観（超越的）

なぜ、必要か?
運不運とか世の流れ、様々な災い、時代背景とかに関係なく、
自分の中に安定的に幸福を作っていく必要があるのでは。
「運命の不意の打撃」に耐える必要があるのでは。
→世俗的な価値観･幸福感にとらわれない。

キュニコス派
アンティステネス（BC.455 ～ 360）
ソクラテスの弟子
「幸福のカギは、自足と不動心にある。」
自足＝あるがままの自分で満ち足りるべき。
→仏教的
持てば持つほど、縛られる。
神は完全なのだから欲望もない。
「自然に従え」→世俗的な価値観にとらわれるな。
一種の文明の否定。動物の様に振る舞う。

ティオゲネス（BC.404 ～ 323）
無一物、無所有の理想
→地位もお金の家もいらない
「ヒッピーの先がけ」
一枚の衣服とずた袋一つ、あちこちを放浪、神殿をねぐらにした

当時ギリシアはアレキサンダー大王に支配されていた。
→落ち目になっていた。日本のバブル崩壊時に似ている。

アレキサンダー大王がやってきたときの逸話
子どもがコップを割ったのを見ていたときの逸話

「自由」が一番大切。
しかし、誰にでもできるものじゃない

ストア学派
ゼノン（BC.336 ～ 264）
ストイック stoic 禁欲的 厳格

「自然に従え」→人間は理性があるのだから。
植物
動物→衝動（本能）に従って生きる
人間→理性に従って生きる。このことが自然に従って生きることだ
　　自然の摂理や法則を、人間は理解することができる。そして従うことができる。

善悪無差別
生老病死

☆哲学的・宗教的幸福観（超越的）
プラトン（BC.427 ～ 347）
ヨーロッパ哲学の代表
この世界では本質的に幸せになれない。

師匠はソクラテス（BC.470 ～ 399）
幸福＝正しく生きること
「正しく生きる」は本人も探求し続けていた
大切なのは、単に生きることではなく
善く生きることだ→正しく、美しく
代表書物「ソクラテスの弁明」「クリトン」

「イデア」論
「イデア」界→時間空間を超越した世界
「現象」界
（物質）界

美しさの分有
美人、絵画、音楽、行為→永遠に保つことができない

美の原理、本質→美のイデア
人間の心だけが美しさを見ることができる。
円を作る原理→円のイデア
描いた円は円のコピーである。

人の心や魂は「イデア」と同族である。
人間の肉体は「現象」と同じである。
→人の心や魂は永遠である。
現実に執着すると、魂は「イデア」界に行けない。
（→ほとんど、宗教だ）

知ることは、思い出すことだ。→「想起」説

この先にあるのは、宗教である。
キリスト教
　カトリック
　ロシア正教
　ギリシャ正教
　プロテスタント
イスラム教
仏教

日本は宗教に寛容、というかルーズ
宗教とはよりよく生きる手段のことだ。
では、
キリスト教
イエス･キリスト（BC4 ～ AD29）
　ユダヤ教の宗教改革者、救世主
父なる神ヤーヴェがこの宇宙を作った
最初の人間をつくる→アダム、エヴァ
人間は原罪を背負って生まれてきた。（カトリックの考え）
アガペー(哀れみの愛)
人間の肉体をまとった神の子キリストを使わした
受胎告知

処刑された後、弟子たちに会いに来る→復活祭
新約聖書には天国の記載は少ない。愛し合えばそこに神の国がある。
最後の審判

欧米の人たちがどの程度のレベルで信じているかはわからないが･･･。

イスラム教
ムハンマト（６～７ c）
　40 歳の頃、洞窟で修行中、神の啓示を受ける。
　アラーの神への絶対的帰依
　神の前では皆平等
　偶像崇拝の禁止
　最後の審判

　天国と地獄のイメージが明確にある。
　ジハード(聖戦＝神のための戦い)

六信五行
　アラーの神、天使、教典、来世、天命、予言者への信仰
　アラーへの信仰告白、メッカへの巡礼、１日５回メッカにお祈り、ラマダン、喜捨
戒律

仏教
バラモン教の改革としてインドで発生

ヒンズー教←バラモン教
アートマン→ブラフマン
梵我一致を目指す

ゴータマ･シッタルタ
根本中道　苦行はダメ、世俗もダメ
四苦八苦→人生は苦しみだ!!
生老病死→人生なんて苦の連続だぁ
ニルヴァーナ→涅槃、煩悩の火が消えた世界→正しく生きていれば達することができる。
南伝仏教、北伝仏教
我、無我

明日は
ラッセル
不幸の脱出方法